

## 夏の内モンゴル草原の「ナーダム」

高 明 潔

友人と一緒に夏の「花火大会」を見に出向いたことがある。「花火大会」の会場でゆかたを着ている若い人の姿を見、家族全員そろってお弁当を食べながらお喋りし、楽しんでいる場面を見、特に夜の空に浮かぶ五彩のきらびやかな形が千変万化に変わる花火を見ながら、人々が子供のよう嬉しんで思わず漏らす「アー」という声を聞くと、私に夏の故郷のモンゴル大草原で行われている「ナーダム」のことを思い出さずにはいられなかった。

「ナーダム」は「娯楽」の意味で、七百年前からモンゴル民族の中で行われていた競馬・相撲・弓術の三種の競技を神に捧げる行事である。内モンゴルの遊牧地域では、

毎年夏の終わり、秋の始めに牧草が茂り、牛や羊が肥ゆるころ、至るところに盟（中国内地の専区に当たる）、旗（内地の県に当たる）、ソム（昔の人民公社、現在の内地の郷に当たる）、カチャ（村）のそれぞれのレベルでナーダム大会が盛んに催される。

昔、伝統的に行われていたナーダム大会は、ただ競馬・相撲・弓術の三種の競技にすぎず、商品貿易があっても、きわめて小スケールなものであった。一九八〇年以來、ナーダム大会は、以上の三種の伝統的な競技をはじめ、芸術団体の演出、モンゴル民謡や大衆の流行歌のカラオケ大会、映画も上映される。また、国家、個人の商品交易、科学技術の展覧なども盛

んに行われている。

遊牧地域でのナーダム大会は、草原の中に作られた会場で行われる。その会場は、ナーダムの中央広場を囲むように作られ、南向きの正北面には司会台が建てられる。大会の主催者や招待された関係者や表彰される模範人物たちがこの司会台につく。この司会台を中心として東西両側ではそれぞれが交易団体や商人、芸人などが使用する臨時のアンペラ小屋（大勢の人や多くのものを収容し、雨露を凌ぐための覆いがしてある）が作られ、その屋根の下で、さまざまに飲食店や食品、衣料品、日用品などの物々交換をする商店が軒を連ねている。また、演劇や講談をする芸人などもこのような小屋を利用して非常に賑やかである。このような司会台や即席の小屋で囲まれた会場は、外から見ると、まるで街のような感じである。このように周りを商店、劇場などに

囲まれながら、会場の中央広場では、ナーダム大会のもっとも人の心をゆさぶる、人の心を打つ競馬・相撲・弓術の三つの伝統的競技が行われるのである。

競馬・競馬は古くから草原の競技になっていく。馬を愛すること、すぐれた馬術は、モンゴル民族の伝統である。モンゴル民族は昔から馬上の民族、即ち騎馬民族の美称を持っている。とりわけ、草原に生まれ育った牧畜民は、老若男女を問わず、みな馬に乗れる。五、六歳の子供は父兄につれられ放牧に出、一〇歳ごろになるとはだか馬に乗って自由に駆けるようになる。ナーダム大会の競馬に出場するために、牧畜民が春ごろから馬の減量や、騎手の選定や、スビードアップなどの訓練が始まられ、ナーダム大会に参加するまでに、馬はかなりの訓練をうけることになる。

ナーダムの競馬に参加する騎手

の数は、少ない時は三十人、多い時は百人以上にもなる。騎手となる人間の年齢に制限はなく、六、七歳の子供がいれば、白髪の年寄りもいる。そして、年齢によって、競争の組を分ける。コースは一般に二五km〜三〇kmである。騎手たちが鮮やかな服装にきれいなはちまきをして、はだか馬に跨がり、鞭をふり揚げて、精いっぱい飛ばすさまは、あたかも美しい霞が草原を流れるようである。道の両側で見物人の歓声が、四方にひびき渡る。競馬が終わり、騎手たちがナーダム会場の司会台の前に並ぶと、主催者が馬の讃歌を謳いながら、優勝した馬に馬乳酒や新鮮な牛乳をふりかけ、順位順に騎手たちに賞品を授ける。

相撲・モンゴル民族の相撲は歴史が古く、早くも十三世紀には盛んに行われていた。モンゴル民族の間で相撲とりは、草原の「ますらお」と呼ばれる。モンゴル民族



自家用車でナーダム大会に向かう牧畜民の家族。後ろは彼らの自家用車である。



すもう選手の上着。  
背中の円形の花模様は、  
吉祥を象徴する仏教図案という。

の相撲には、独特の服装、ルール、方法があるので、「モンゴル相撲」と称される。相撲とりの上着は、牛皮で造られた半袖で、銀や銅のボタンが嵌められ、背中には円形の銀の鏡、または吉祥を象徴する図案の刺しゅうがある。下はだぶだぶのズボンの上に、くるぶしか膝の上まで動物や花模様を刺しゅうされた短いズボンを重ねて、腰に赤、青、黄三色の飾りが施された腰巻をまき、足にはモンゴル式の皮ブーツをはく。その威風堂々たる姿は、古代騎士の観を思わせる。相撲の人数は、八・十六・三十二などの偶数で、参加者の年令と体重は問わない。草原の相撲は、平らな柔らかな場所さえあればどこでも簡単にやれる。ナータムの場合、相撲が会場の中央広場で行われる。観衆は広場で輪を作って地面に坐り、試合の始まる前に、双方とも、豪壮で挑戦的な歌を歌って応援する。二回ほど歌うと、

選手は「鷹」の飛び姿を真似し、頭をあげ、腕を振って踊りながら入場し、周囲の観衆にあいさつをする。相撲の取り方は、立ったまま取り組み、膝以上が地に着けば、負けとなる。相手を倒した時、勝者は敗者の手をとって立つのを助け、互いに礼をしてから、再び踊りながら退場する。チャンピオンは華やかな綾錦に飾られて、馬一匹か牛一頭、またはその他の賞品をもらう。

弓術・弓術もモンゴル民族の伝統的な競技の一つで、立射と騎射がある。通常、一人が交代で九本の矢を三回に分けて射、三人一組で試合を行う。的に当たった数の多少によって勝負を決める。試合の時には射手は色とりどりのモンゴル式の長い服を着、足に長靴をはく。立射と騎射のいずれも、審判員の号令のもとで、矢をかけて、弓を張り、的に向かって同時に射る。命中した的の環がはずみでは

ずれると、観衆がどつと喝采する。最後に大会主催者から一人ずつ賞品が授与される。

競馬・相撲・弓術は、モンゴル民族の「男児の三芸」と呼ばれ、草原でも一般的に行われているスポーツであり、成年男子の欠くべからざる技能となっている。このため、牧畜民の男性は皆、積極的にナードム大会のこの三種の試合に参加し、これをチャンスとし、できる限り自分の威風堂々たる「ますらお」ぶりを大勢の人の前で披露する。

内モンゴルの草原遊牧地域では、牧畜民の居住はかなり分散的で、商業もあまり発達していないので、牧畜をする人々は、長い間自給自足に近い生活を送っている。人が大勢集まって、買い物をするのは、このナードムだけである。牧畜民は、常々買いたいと思っていた生産用や生活用の必要品を、この機会にぜひ全部揃

えたいと思う。商人にとつても大金が入る機会である。それにしても、モンゴルの放牧民の買いつぶりは、おおらかという外はない。その商品が必要とするなら、好きになつてしまつたなら、値段も聞かないし、ましてかけひきなど

せず、支払いの段になると、ふところからあり金を全部つかみ出して、その中から売り子に勝手に取らせる。このような買いつぶりをみると、恐らくモンゴルの牧畜民はまだ未開民だと容易に思う人間が少なくないと思う。しかし、私はそのような買いつぶりを見るたびに、今日のような人と人の間にあるべき誠意と信頼というものが希薄になっている時代に、世の中の人すべてが、モンゴル草原の牧畜民が買いつぶりで見せるような、誠実と信頼を持ち合わせていたら……というような願いが胸に湧いてくる。

日本の「花火大会」でいろいろ

見聞きしているうちに、このような夏のモンゴル草原のナードムのことだと思ひ出され、モンゴル大草原にいた時のあの素朴で純粋な空気に、また私が包まれていくような感じがした……。

(愛知大学現代中国学部講師)



ナードム会場に軒を連ねている商店で買いつぶりをしている牧畜民。